

【I/HEAP 読書会】担当：鉦 悠介(広島大学大学院 教育学研究科)

Seixas, P.(2000). Schweigen! die Kinder! or, Does Postmodern History Have a Place in the Schools?

(Schweigen! die Kinder! 静かに！子供達！)

著者紹介¹

名前 Peter Seixas

略歴バンクーバーで高等学校社会科を 15 年間教えたのち、カリフォルニア大学で Ph.D.取得。UBC 歴史意識の研究センター長

所属ブリティッシュコロンビア大学(2016 年 6 月退職、名誉教授)

研究テーマカリキュラム研究、歴史教育と歴史意識、教育学、社会科教育研究、集合的記憶、歴史意識



(引用元：ブリティッシュコロンビア大学
<http://edcp.educ.ubc.ca/faculty-spotlight-peter-seixas/>)

有名な論文や書籍

Stearns, P. N., Seixas, P. C., & Wineburg, S. (Eds.). (2000). *Knowing, teaching, and learning history: National and international perspectives*. NYU Press.

Seixas, P. C. (Ed.). (2004). *Theorizing historical consciousness*. University of Toronto Press.

Seixas, P., Morton, T., Colyer, J., & Fornazzari, S. (2013). *The big six: Historical thinking concepts*. Nelson Education.

HP

ブリティッシュコロンビア大学：<http://edcp.educ.ubc.ca/faculty-staff/peter-seixas/>

Historical Thinking Project：<http://historicalthinking.ca/peter-seixas>

訳出や意味が難しい単語・概念

- ・ Disciplined(p.24 など)
- ・ Social Purpose(p.22 下から 2 行目)
- ・ positionality(p.27 2 段落目)
- ・ gaps and silences (p.30 2 段落目上から 4 行目)
- ・ discursive organization(p.30 上から 4 行目)

議論したい議題

どの目的(ends)に向かって歴史を教えるべきかの問題に結局行き着くと論じる Seixas だが、「集合的記憶についてコンセンサスのある社会」が集合的記憶の向上のアプローチのみを用いているとして、その事態について Seixas はどう評価すると考えられるか？（主に Conclusion から）

¹ <http://historicalthinking.ca/peter-seixas>

有名な論文や書籍のみ、Google Scholar の被引用件数上位 3 件を抽出

【概要】

Seixas は歴史教育に見られる集合的記憶アプローチと学問的歴史アプローチに続く、ポストモダン派によるアプローチを取り上げる。ポストモダン派のアプローチは歴史教育に対して有益さを持つと同時に自己矛盾に陥る危険性を持ち合わせる。結論として、Seixas は複雑で複眼的な歴史の真実を理解させる歴史教育の可能性を示唆する。

(前文)(pp.19-21)

- ・ 1998 年にブリティッシュコロンビアとニスガ族(Nisga'a)との間に結ばれた条約についての議論がある。
- ・ 条約に反対する人々の見方：当時土地は余っていて、先住民は技術的に遅れていて…
- ・ 条約に賛成する人々の見方：当時先住民はかなりの人口で、複雑な社会であり…
- ・ 教師が歴史を扱う 3つの方法を本稿で扱う：最善の物語を教える「集合的記憶の向上」、歴史の両方の見方を教えてより良い解釈がどちらか決断させる「学問的」アプローチ、様々な集団がどのように過去を歴史として組織立て現在の目的にかなうように用いるかを理解することを重視する「ポストモダン」アプローチ

過去についての最善の物語：集合的記憶を形成するための学校の歴史(pp.21-23)

- ・ 過去の最善の解釈を教えなければいけないという考え方がある。アメリカの歴史カリキュラムや博物館展示に関わる論争などはこのスタンスから出発している。「どの歴史的解釈を教えるべきか？」という中心的な問いがこれらの論争にある。
- ・ 上述の論争の異なる立場が支配しようとしているのは、現在の私たちの定義、他者との関係、市民社会における関係、未来の行動のための幅広い要因である。ブリティッシュコロンビアの学校は「西洋を建設する」という進歩的物語の一部として地域史を描く。
- ・ ここ 25 年間は学校の歴史は周縁の人々が組み込まれる形に修正されているが、国家建設の物語は必ずしも覆されず、過去の最善の物語に組み込まれている。この修正版の最善の歴史は、現在の多文化主義の前奏曲としての過去の移民の関係を見る枠組みを提供している。
- ・ 先住民の人々を含みこむ新しい物語を作ることは、(学校教育ですでに起きている以上に) 国家建設の物語をより根本的に修正することになる。しかし、先住民を本格的に歴史に含みこむことは、その発展が支配的なナラティブ・フレームワークをもたらす「国家 nation」としてのカナダから超えてしまう。
- ・ 最善の歴史が生徒にもたらすものはアイデンティティ・団結・社会的目的の 3つ。
- ・ 学校のこの歴史の考え方の問題点：1.過去の正しい見方を決めるのは難しい。2. 歴史を教義としてみることによって、生徒はその知識を吸収することだけが仕事になる。

鍛錬された知識での活動としての学校の歴史：知る方法としての歴史(pp.24-26)

- David Lowenthal は「歴史 history」と「遺産 heritage」を分けた。「遺産」は、過去を現在の利害関係を支持・反対するために用いること（「兵器としての歴史」）。「歴史」は利害関係を持たない。普遍的で、公的で、議論の対象となり、反証可能なもの。
- この二分法に従うと、現在の学校は「遺産」を行っている。「歴史」を導入するならば、ニスガの条約の場合では、生徒が歴史的記述、初期のブリティッシュコロニア入植、ニスガ族の歴史を調査して、対立する解釈を評価することになる。客観的で、過去の人物に現代的な概念を過剰に押し付けず、アイデンティティ・ポリティクスも入らず、生徒は過去の違いや特有さを見て…
- （4段落目）このアプローチのメリットは、リベラル・デモクラシーにおける批判的市民の教育に適している。理にかなった、情報に基づく意見に自力でたどり着く能力と性向を育てることができる。
- （5段落目）このアプローチに対する批判は4つ。一つ目の批判は歴史教育を集合的記憶への介入とみる立場からのものである。彼らにはその介入計画の破壊や脅威に見える。
- 二つ目の批判は、生徒が相対主義に陥るのではないかというもの。しかし、生徒はすでに対立する歴史解釈に大衆文化の中で触れており、それらを評価する方法が必要である。それゆえ、学問的手続きを教えないほうがもっと相対主義になるだろう。
- 三つ目の批判は歴史の認識論に対する疑問。ポストモダンの立場による「歴史的知識が構築される社会的文脈」への注意が、学問的歴史と学校歴史の関係についての仮定を覆しつつある：後の節で詳述する。
- 四つ目の批判は、アイデンティティの問題を意図的に歴史の学びから排除することは、そもそも歴史を学ぶニーズを満たせるのかということである。

学校の歴史へのポストモダンの挑戦(pp.26-31)

- （3段落目）（特にフーコー派の）理論の寄与は「自然で、所与のものとされたものを疑う」刺激となったこと（Jonathan Culler）
- ポストモダンの批判は4つ：歴史の物語性、歴史家のポジショナリティ、進歩の限界性、資料のテキスト性。
- 歴史の物語性。歴史記述がナラティブで組織され言語的規則などを持つのに対して、過去はそれらが無い。ナラティブ形式を当てはめることで初めて歴史に意味が現れる。それゆえ、歴史編纂 Historiography は社会科学的行為というよりは文学的・詩的行為である。ナラティブを構築する際に、歴史家は言語に制限を受ける。何が語りうるかについての制約を加えようという強い精神無しに一貫した語りを作り出すことは難しい。
- この結果として出てくるのが歴史家のポジショナリティである。全ての歴史的記述は根本的に立場性と政治性を持つ。ポストモダン主義者は歴史の学問と集合的記憶の分断に異議申し立てする。歴史は過去を記憶する数ある方法の一つに過ぎない。しかし、ポス

トモダン主義は「あなたはどうやって自分の立場を理論化するのでしょうか、これまでの歴史家に対して自分がしてきた批判からは逃れるような立場で」という有名な苦境に立たされる。

- ・ 進歩についての問題。進歩や衰退は歴史のナラティブの大きな評価的枠組みである。しかし、そのような「ポストモダン時代における進歩の終わり」という判断はまさしく、ポストモダニストが問う大きなナラティブの説明(contextualize)である。
- ・ テクスト性の問題。過去についての解釈する唯一の方法は残されたテキストの解釈である。そして解釈にはその資料が直接的に発している情報だけでなく、推論的組織化や、生産物の状態や、使われ方についても知られる必要がある。この過程の後に残されたものは解釈であって、過去そのものではない。Chartier「社会的なものの推論的構築と、言説の社会的構築を結びつけること」

ポストモダンと学校(pp.31-33)

- ・ 学者以外の人々についてはどうか？ 若者は異なるナラティブについてどのように判断を下すのか？ Seixas の研究では、1860年代のアメリカ西部について描いた2つの映画、Dances with Wolves(1990)と The Searchers(1956)を見た生徒のうち、ある生徒たちはこの違いを過去の新しい発見の進歩的蓄積のせいかとして見て、他の生徒は映画作成者の異なるイデオロギー的環境の結果として見た。
- ・ 物語論(narrative theory)の教育的可能性は Tom Holt が示唆する(高校生に自伝を作らせる実践)。しかし、このようなプログラムが様々な年齢の生徒に対して与える影響についてはまだ調査の余地が残る。
- ・ 教科書の進歩の概念を疑わせ、知識に進歩はないことを、また、リベラルな考え方を疑うことはレトリカルな言葉遊び以上になるのか？そのようなプログラムが公的サポートを受けうるか？
- ・ 進歩や衰退といった書き手が用いている基準について吟味し、そのナラティブによる議論の構造を特定する。学校教科書を吟味することが、進歩のサブテキストを浮かび上がらせるだろう。その主張の妥当性について疑問が出たら、教師は生徒を学問的探求へと導きうる。もし、学校の権威は生徒に歴史的進歩の物語に触れさせたいのだという観点からそれらを疑問視するなら、生徒はポストモダンの領域に動いているだろう。

結論(pp.33-35)

- ・ (最終段落) 歴史を歴史化することは、真実を打ち立てる今日の手法が今日の手法に過ぎないことを理解することである。しかし、現代のための複雑で複眼的な歴史の真実を打ち立てる方法がないということではない。生徒にこれらの手法での教育を与えないことは、彼らを現代文化への参加から排除することである。